

しなやかに生きる社会人の育成を目指したキャリア教育の在り方について

-学びと自分をつなぐ「進路ノート」を中心にした取組-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
岡村 美香

実習責任教員 藤井 伊佐子
実習指導教員 阿形 恒秀

キーワード: キャリア教育, 進路ノート, 学びと自分

第1章 テーマ設定の理由と研究構想

第1節 問題意識

これまでの教職経験で、高校3年間を見通した進路指導ができてないのではないかという反省がある。そこで、高校3年間を見通したキャリア教育の在り方について研究したいという思いを強く持つようになった。

第2節 学校アセスメントの概要

実習校は徳島県西部に位置する豊かな自然に囲まれた農業科単独分校である。卒業後の主な進路は就職で、農業科であるが、卒業後に農業に従事する者はほとんどいない。

学校アセスメントは、教職員への聞き取り調査と生徒・教職員へのアンケート調査を行った。

聞き取り調査から、生徒は素直で人懐っこいという良さがある反面、周囲に依存的で、社会認識が不足しており、人間関係形成能力が低いという課題が挙げられた。また、キャリア教育・進路指導の課題として、系統立てた指導ができていない、学校全体の指針等が共通理解されていない等が挙げられた。アンケート結果から、基礎的・汎用的能力の4つの能力すべてを重要視すべきであること、働く意義を考えたり自分の将来や社会とのつながりを考えたりするキャリア教育が必要なことが分かった。

第3節 テーマ設定と研究全体構想

学校アセスメントを踏まえ、次のようなキャリア教育をすべきだと考えた。

・目指す生徒像を共有し、学校全体で高校1・2年生の段階から系統的に行うキャリア教育

・「学んだことと自分自身をつなぐこと」「社会を理解することと自分自身を理解すること」を重視し、基礎的・汎用的能力の4つの能力すべてを大切に扱うキャリア教育

そこで、強さ、適応力、優しさ・協調性を持ったしなやかに生きる社会人の育成を目指し、学びと自分とをつなぐ「進路ノート」を中心とした実践を行うこととした。

第2章 先行研究及び先行事例の分析

第1節 先行研究の分析

児美川 (2013) は、『『キャリア発達』のための力量形成に資するのが、『キャリア教育』』とした。そして、キャリア教育には「生徒の希望や向上心を“炊きつける(加熱する)”役割と、それを適切に“冷却して”現実に着地させる役割」があると述べている。『高等学校キャリア教育の手引き』(2012) は、「日々の授業、学校行事、生徒会活動や部活動においても教職員の共通理解のもとキャリア教育に取り組む態度が重要」としている。なお、中央教育審議会答申(2016.12.21)では、「キャリア・パスポート(仮称)」の活用を検討することを明記している。

「知の総合化ノート」は、生徒が様々な体験を通して学んだことから自分が身に付けたい力

に関連したものを分析・整理し、関連付けていくノートで、村川ら（2015）は、21世紀型能力を育成するツールとして有効だと述べている。

奈須（2017）は、その教科の見方・考え方を生かして教科をしっかり教えることが資質・能力の育成につながるとしている。

第2節 先行事例

川村（2014）は、実習校で「リーダーとして必要な資質能力の省察」と「学習振り返り」をテーマにした「リフレクションノート」を実践した。兵庫県・青森県は、小学校から高校までの活動を記録するキャリアノートを作成し、体系的なキャリア教育が行えるようにしている。

第3章 学校課題フィールドワークにおける実践

第1節 実践計画とねらい

まず、ワークショップ（WS）型研修を通じて教職員間で目指す生徒像を設定・共有する。それと並行して、学びと自分自身をつなぐ「進路ノート」、進路ホームルーム活動の提案を行っていく。また、活動の目的・意義の伝達、行ってきた実践の共有のために通信を発行する。なお、1学期の実習内容の検証を踏まえ、9月から新たにキャリア教育を意識した授業作りにも取り組むことにした。これらの活動を通じて、しなやかに生きる社会人の育成を目指していく。

評価は、基礎的・汎用的能力と勤労観・職業観を測る生徒・教職員アンケート結果の変容と、実践内容に対する生徒・教職員のアンケート・感想を基に、成果と課題を考察する。

第2節 「進路ノート」を使った活動

実習校の既存の「進路ノート」を基に、教職員の意見も参考にしながら、学んだことと自分

自身をつなぐ手立てを加えた新しい「進路ノート」を作成し、活用した。生徒は、学校生活で得られた学びを毎日最低1つずつ記録していく。そして1週間の学びから、一番だと思ふ学びを付箋に書き出し、個々に考えた「自分が付けたい力」を書いたページの中で、一番関連が深いと思ふページに貼り付けていく。そして、学期末ごとに付箋を構造化していき、自分がどんなことを学び、どんな力が付いてきたかを確認していくのである。

この活動の成果として、生徒ができることやこれからすべきことが認識できること、自己の成長を実感できること等が挙げられる。一方、課題として、意義・目的を感じられない生徒や学びが書けない生徒への対処が挙げられる。課題解決のために、意義・目的のさらなる啓発とともに「自分が付けたい力」の設定方法の改善や、成果の見える化等の工夫が必要である。

第3節 進路ホームルーム活動の提案

進路ホームルーム活動では、生徒の自己理解と社会認識の育成を図ること、生徒の希望と現実との折り合いを付けさせて、「やりたいこと」「やれること」「やるべきこと」の三者が交わる場所での進路決定を目指すことを意識した。

（1）テーマ「社会から求められる人を考える」

（2年生 2017年5月11日実施）

社会から求められる人はどのような人かを考えるWSを行い、その後、各自でそんな人になるためにはどうしたらよいか考えた。

（2）テーマ「進路に関する講話」

（3年生 2017年6月15日実施）

挫折を経験しながら進路決定した生徒、偶然のできごとをきっかけに進路決定した生徒など卒業生の話を中心に講話を行った。講話を肯定

的に受けとった生徒が多かったが、働くことを悲観的に捉えている感想もあった。そこで、働くこと自体の意義に対する理解を促すために、事後指導として通信を配付した。

(3) テーマ「ジョハリの窓」

(1年生 2017年6月22日実施)

自分が思っている自分と他者から見た自分を比較することで、自分への理解を深め、周りに関わることで新しい発見があることに気付かせた。そうすることが、進路を考える第一歩と考えたからだ。

(4) テーマ「1つの商品が届くまでにどれくらいの人に関わっているだろう？」

(2年生 2017年11月9日実施)

「いちごジャム」ができるまでにどれくらいの人に関わっているのかを考えた。その中で、1つの商品にたくさんの人に関わっており、一人一人が自分の仕事に責任を持たなくてはならないことに気づき、社会にはいろいろな仕事があることを理解して仕事選びの視野を広げた。

どのホームルーム活動も生徒たちは活発に活動し、事後のアンケート結果も好意的な内容だった。自己理解と社会認識を深め、現実との折り合いをつけながら前向きな進路決定を目指すことに対する効果はあったと考えられる。しかし、活動したことを生徒自身の毎日の生活につなげていくためには、さらなる工夫が必要である。ホームルーム活動をきっかけに継続した指導を行う必要性を感じた。

第4節 目標の設定と実践の共有のために

目指す生徒像の設定・共有のためのWS型研修と、実践内容や目的・意義の共有のために生徒・教職員向けに通信を発行した。

WS型研修は、活動の目的を明確にすること、

タイムスケジュールを明確にすること、研修後を大切にすること、以上3点に留意して行った。

①「卒業までに身に付けたい力を考えるWS」

(2017年3月13日実施)

マトリクス法を用いたWSを行った。生徒の良さや課題を考え、それを基に各グループで卒業までに身に付けたい力を考え、発表した。

②「卒業までに身に付けたい力を育てるための方策とは？WS」

(2017年4月1日～4月17日実施)

前回のWSに対する「(生徒の課題の)解決策について研修したい」という感想を受けて行った。研修をする時間がないので、職員室に模造紙を貼り、各自で付箋に意見を書いて貼ってもらう形をとった。今回もマトリクス法を用いた。付箋の構造化は筆者が行った。

③「卒業時の生徒イメージを共有するWS」

(2017年5月24日実施)

卒業までに身に付けたい力を基礎的・汎用的能力の4つの能力で分類した表を見て、4つの能力ごとに一番大事だと思う力を一つ選び、その力が身に付いた生徒を想像し、それを参考に卒業時の生徒イメージを設定した。

これらの研修を通して、生徒の良さや課題を再認識し、卒業時の生徒イメージを共有することができ、それを目標にこれからの教育活動を行っていけることが成果である。一方、方策を提案したものの、具体的な行動につなげるような研修等を行っていない点が課題である。

通信は、「進路ノート」等の活動の目的・意義を伝達すること、先生方の実践や生徒が書いた学びの記録を共有すること、キャリア教育等の情報を提供することをねらいに発行した。生徒用12枚、教職員用16枚発行した。

通信を通じて生徒の学びを紹介することで、

生徒にも教職員にも新たな気づきが生まれた。また、実践や情報を共有する方法としての成果もあった。ただ、読みたい、読んでみようと思わせる見せ方の工夫やテーマ選びが課題である。

第5節 キャリア教育を意識した授業作り

キャリア教育を意識した授業作りでは、キャリア教育を意識した授業参観シートを作成し、それを使っての授業参観と、筆者が行う日本史の研究授業の2つに取り組んだ。

授業参観シートは、基礎的・汎用的能力の4つの能力を新学習指導要領の育成したい資質・能力の三つの柱に沿って整理した中央教育審議会答申(2016.12.21)別紙6「キャリア教育に関わる資質・能力」を基に項目を作成した。授業参観は、任意の授業1時間を公開授業とし、お互いの授業を参観した。

研究授業は3年生で行った。「学ぶこと・働くことの意義の理解」を意識し、農業を学ぶことは大事だと思える授業作りを目指した。テーマは「江戸時代の飢饉を防ぐ方法を考える学習を今の自分に生かそう」である。振り返りアンケートでは、問1「事実や周りの人の意見を参考に理由を考えることができた」、問2「農業を学ぶことは大事だと思った」ともに肯定的意見が多かった。研究協議では、キャリア教育を視点にした授業が生徒の自己肯定感を高めた等の良さが挙げられた。一方で、林業や園芸を学ぶ生徒にとって食糧生産は身近なものではないため、凶作の原因である自然災害から山林管理へと話題を進めるべきとの改善策も挙げられた。

この取組の成果として、授業参観シートの作成によって、キャリア教育を意識した授業作りのポイントが明確になった。また、育成を目指す資質・能力を意識すること、各教科の「見方・

考え方」を働かせること、生徒の実態に合わせることが、キャリア教育を意識した授業作りにつながる事が分かった。また、授業参観については、参観をきっかけに教員間で授業について対話する機会が持てたことも成果である。

一方、課題としては、授業参観の実施方法の工夫が挙げられる。授業1時間すべてを参観するのは難しい現状があるので、授業担当者に、その授業で見てほしいポイントを挙げてもらい、その時間帯のみ見てもらう等の改善が必要である。また、授業参観シートの活用を含め、キャリア教育を意識した授業に関する実践の共有や知識等の広報も必要である。

第4章 学校課題フィールドワークの成果と今後の課題

第1節 学校課題フィールドワークの成果

「進路ノート」での振り返りや学校全体でのキャリア教育の取組により、生徒たちが自らを見つめる視点を持てたことが成果として挙げられる。そのため、基礎的・汎用的能力、特に「みつめる力」の育成に効果があった。また、教職員一人一人のキャリア教育に取り組む意識を高められたことも成果である。

第2節 今後の課題

「進路ノート」活動の意義・目的のさらなる啓発、方法の改善や成果の見える化等の工夫が必要である。また、取組の効率化も課題である。方法を工夫改善し、少ない労力で効果の上がる取組を目指したい。さらに、大きな課題として、社会認識の育成への取組が不十分だったことが挙げられる。取組の中心だった進路ホームルーム活動は各学年1～2回の実施に終わっている。事後指導を含めた充実を図り、一過性のもので終わらせないようにしたい。